

極上御曹司と甘い一夜を
過ごしたら、可愛い王子ごと
溺愛されています

羽村美海

Mimi Hamura



Eternity
BUNKO

目次

極上御曹司と甘い一夜を過ごしたら、
可愛い王子ごと溺愛されています

永遠に解けない魔法を君に

書き下ろし番外編

解けない魔法

305

273 5

極上御曹司と甘い一夜を過ごしたら、

可愛い王子ごと溺愛されています

1 解けない魔法

その日はお互いに酔っていたのだと思う。

あの最悪な出会いから一週間と経たないこの日、彩芽はたまたま職場の同僚に合コンの穴埋め要員として誘われた。

そこで彼と再会を果たすとも思わなかったし、ましてや一夜を共にすることになろうとは、夢にも思っていなかった。

何せこの春二十二歳になったばかりだということのに、彩芽は未だ恋の経験さえもなかった。

だということに——合コン帰り、助けてもらったのをきっかけにお洒落な雰囲気のパーに連れて行かれた流れで、思いがけず大好きなチョコレート談義に花を咲かせることになった。

その上、長年抱いていたコンプレックスをうっかり吐露してしまったせいで、未知の世界へと足を踏み入れることになろうとは……

「だったら、ちょっと試してみない？ 俺とそういうことができるかどうか」

まるでおとぎ話の王子様のような男から、まさかそんな提案をされるとは思わず、彩芽は驚きのあまり問い返す。

「……試してみるって、どうやって……?」

目をパチパチさせキョトンとする彩芽に、男は眩しいくらいの微笑みを湛え、思いの外優しい声で囁きかけてくる。

「そんなに難しく考えなくていいから。ほら、目、瞑ってみて?」

急な展開に何が何やらわからないながらも、あの時の彩芽には不安よりも好奇心が遙かに上回っていたのだと思う。どこからともなく湧き立つ期待感から、思わずゴクリと喉を鳴らす。

彼の甘い声音に唆され、彩芽は彼の声に操られるかのように瞼を閉ざした。

わずかの間を置いて、彩芽の唇に柔らかな何かが触れる感触がもたらされた。その瞬間——おそらく魔法にかかってしまったのだと思う。

今まで自分には無縁だと思いついていた「恋の魔法」とやらに。

厄介なことに、これは今も解けてはいないのだろう。

いや、むしろ呪いとも言った方がいいかもしれない。

あのキスのせいで、彩芽の心は今でも囚われたままだから——

決して叶うことのないこの想いは、昇華されなまま未だに燻り続けている。けれど、私にはこの子がいる。自分の血を分けたこの子がいてさえくれれば、何だつてできる。この三年間、彩芽は事あるごとにそう自分に言い聞かせてきた。

* * *

彼との出会いは、最悪なものだった。

当時、製菓専門学校を卒業し長年の夢だったシヨコレティエールとして、有名百貨店に店舗を構えるチョコレート専門店で働き始めた頃。急病で欠勤した店舗スタッフの代役を務めていた時のことだ。

社会人になってまだ間もない上に、慣れない店舗業務にもたついていたのも事実だった。

「あら、この可愛らしいお嬢ちゃんはアルバイトの方かしら。どうりで接客がなつていないわね」

「この店の教育はどうなつているのかしら」

「美味しいと評判だつて伺つたのに、これじゃあ期待できないわね」

各店舗で以前からクレマーとして知られる傲慢なマダムから立て続けに罵られ、言い返すことなど許されない彩芽はただひたすらに頭を下げて耐えるほかなかった。

「あのう失礼ですが、円城寺えんじょうじさんでいらつしゃいますよね？ いやー、ご無沙汰しております」

よく通る爽やかな声音でそう言つて現れた、どうやら顔見知りらしい彼の登場によつてマダムの態度は一変し、その場は収まったのだが……

マダムが機嫌良く帰つた後、彩芽が彼に礼を告げた際。

「当然のことをしたまふだよ。それに、まだ君、女子高生のおようだし。可愛いアルバイトの君にこの仕事を嫌になつてほしくないからね」

幼い頃から標準的な身長を下回つていた彩芽がもう何百回、いや何万回と耳にタコができるほど聞き慣れたフレーズが彼の口から放たれた。

——またか……。確かにチビですけど。こう見えてもう成人した立派なレディーなんですからね。女性を見かけで判断したら痛い目見ますよ。それにさすがに女子高生は言い過ぎだと思つんですけど！

いくら地雷を踏まれたとはいえ、助けてもらったことも柵に上げ、彩芽の胸の内は少々やさぐれ気味だった。

身長一四六センチという、成人女性の平均身長を大きく下回る彩芽にとって、小柄な

体型はコンプレックスでしかないのだから仕方ない。

そんな彩芽の複雑な乙女心などまったく気づいていないのであろう、この爽やかなイケメンは、事もあろうに、人好きのする完璧なキラースマイルを携えてとんでもない暴挙に出た。そして彩芽の乙女心をスタスタにしたのである。

もちろん、よかれと思つての言動だと重々承知しているし、この男に悪気なんてまったくないのはわかつている。だけど――

「はい、どうぞ。美味しいガナツシユ——生チョコ食べてお仕事頑張つてね。それじゃあ」
初対面の見目高校生の女の口に、まるで小さな子どもにするようにたつた今買ったばかりのガナツシユを放り込むのは如何なものか。

まんまと釣られて口を開けてしまった自分もどうかと思うが、不可抗力だった。

——あれか？ イケメンなら何をしてでも許されるとでも思っているのか？

確かに、彼のキラキラと煌めく笑顔はどこぞの王子様かと見紛うほどだったのは認めよう。

——でも、だからって……！ いや、もういい。どうせもう二度と会うことなどないのだから、忘れることにする。

彩芽は顔と共に小さな身体を紅潮させつつも、なんとか全神経を集中させて笑顔を取り繕った。

高校生に間違われるのはこれまでもままあることで慣れっこだったが、どういうわけかこの時の恥ずかしさと悔しさと言つたらなかった。

彼が店舗スタッフの間でかねてより噂されていた、週一で来店して決まってガナツシユを買っていくという謎のイケメン——通称「ガナツシユ王子」であることは後に知ることになる。

* * *

週末の土曜日の仕事帰り。

同僚にはほぼ強制的に連行されてしまった苦手でしかない合コンで、彩芽はガナツシユ王子——神宮寺駿じんぐうしゅんと予想外な再会を果たすことになった。彼は彩芽が成人していると知つてひどく驚いている様子だったが、どこか嬉しそうな柔和な笑みを浮かべていて、彩芽はその笑顔からなぜか目が離せなかった。

挙げ句、帰りに酔っ払いに絡まれ困っていたところに彼がヒーローのごとく颯爽と現れたのだ。

「俺の可愛い彼女に何か用があるなら代わりに聞きますけど？ それにこの汚い手、今すぐ離してもらえませんか？ 目障りなんで」

彩芽の腕を掴んでいた酔っ払いの腕を赤子の手でも扱うように、簡単に捻りあげて撃退してしまつたのである。

細身な彼の意外にも男らしい姿を目の当たりにした彩芽の胸は、この時どういふわけかトクトクと高鳴るといふ、不可解な反応を示した。

自身の不可解な反応に戸惑うあまり、酔っ払いが消えた後も、彩芽は身動きさえできずに突っ立っていたのだが。

「彩芽ちゃん。手、震えてるけど大丈夫？」

さらに彼は、酔っ払いから解放された彩芽の震える手を優しく両手で包み込む。そしてすかさず身を屈めてこちらに視線を合わせ、小首を傾げて上目遣いで様子を窺うイケメンの前に、男性に免疫のない彩芽は余計に動けなくなってしまう。

「……え？ あつ、はい」

それでもなんとか返答した彩芽の様子に、彼は怖がっているからだと思解したらしく、思いの外優しい声音で囁きかけてくる。

「全然大丈夫じゃないみただね。心配だから静かなところで休んでから送ってあげるね」

あたかも合コンで女の子をお持ち帰りでもする時の常套句のような台詞だ。それなのに彩芽は抗うことなどできなかった。

手慣れた様子で彩芽の小さな手を引いて歩み出してしまつた彼に促されるままに足を踏み出すことしかできない。

未知の世界へと誘われるようにして、すぐ近くに行きつけの店があるからと彩芽が連れて行かれたのは、しっとりとした落ち着いた雰囲気「チャーム」というバーだった。

キャンデルのような、温かみのある灯りが灯るカウンター席。

そこに彼と隣り合わせで腰を落ち着けた彩芽は、彼の知り合いだという年配のオーナーを交えての談笑に耽っていた。

王子様然とした見かけとは違つて少々強引だった彼だが、毎週ガナッシュを買いに店に通つてくるだけあり、チョコレートのことによたらと詳しかった。

そのせいでいつしか彼に対する警戒心も緊張感も薄れ、無類のチョコ好きが高じてシヨコレティエールになつた彩芽は、もうすっかり彼と打ち解けてしまつていた。

けれどまさか――

「私、男の人と付き合つたことがなくて。気の利いたことも言えなくてすみません」などと口走つたばかりに、男性経験どころかキスの経験さえもないとコンプレックスをうっかり吐露してしまうなんて。

「だったら、ちょっと試してみない？ 俺とそういうことができるかどうか」
いくら優しい声音でそんな言葉をかけられたからって。

「そんなに難しく考えなくていいから。ほら、目、瞑ってみて？」
彼にそう促されたからって、言われるままに流されてしまっただなんてありえない。酔っていたからだとは思えない。

その結果——気づいた時には、シティーホテルの部屋にいて、キングサイズのベッドの上で彼に組み敷かれているという……キスどころか恋の経験さえない彩芽にとつては、夢だとしか思えない驚愕の展開だった。

だからといって、彼に強引にホテルに連れ込まれたわけでは断じてない。

長年、小柄な体型がコンプレックスの彩芽とは対照的に、背もすらりと高く華やかな容姿をしている、五つ上の姉・咲良と比較され続けたせいで、彩芽はずっと女性としての自信を持ってずにいた。

そのせいか昔から猫背気味だったし、見た目が少々地味で野暮ったく見えるというのもあったかもしれない。でもこれも彩芽がそう思い込んでいただけで、咲良とは身長差はあるものの、実際には容姿は劣ってなどいない。咲良が派手系美人だとすると、彩芽は地味系美人といえる。

むしろ咲良を含め、両親や周囲からは小動物のようで可愛いと思われているぐらいである。

勝気な性格こそ姉妹で共通しているが、咲良の方が自由奔放でいささか我儘なところがあった。
というのも、咲良は大学生の頃より読者モデルとして活躍しており、周囲からチャホヤされてきたせいだ。今では売れっ子モデルとして、雑誌やテレビなどメディアで見ない日がないほどである。

それゆえに彩芽は事あるごとに姉と比較され、幼い頃より周囲の男子から幾度となく「チビ」だと揶揄からかわれてきた。勝気な性格も相まって、彼らに反発するうちにいつしか男子に対して苦手意識を抱くようになっていた。思春期になる頃には揶揄からかわれることも減り、何人かから告白もされはしたが、自分に自信が持てない彩芽は男性に対して自分から壁を作っていたことに気づいていない。

今では完全に開き直って、恋よりも仕事。

早く一人前のシヨコラティエールになって、いつの日か自分の店を出し、日本一のチヨコレート専門店にしてみせる——そんな無謀な夢を掲げて、ずっと恋愛から逃げてきた。けれど本当は、心の奥底では誰よりも恋に憧れていたのだ。

友人に彼氏ができるたびに羨ましかったし、いつか自分にも——そんな風に夢見てきた。

だが咲良の存在が厚く大きな壁のように眼前に立ちはだかり、一步踏み出す勇氣が持てずにいただけ。

彼はそんな彩芽の背中を後押ししてくれた。

合コンでの自己紹介の際にも、杜若彩芽という漫画の主人公のような名前を耳にして、クスリとも笑わなかったのは彼だけだった。

彼は、少し前に失恋したばかりだと言っていた。

失恋で傷ついた心を癒やしたかったのかもしれない。

いや、「かもしれない」ではなく、そうだったに違いない。

彩芽にとっては、決して忘れることのできない大切な思い出としても——彼にとっ
ては違う。

だからあの夜のことは、一夜限りの魔法。彩芽はそう自分に言い聞かせていた。

煌びやかな都会の夜景が望める、お洒落なホテルの一室。

神々しいほどにキラキラと煌めく王子様のような彼は、酔っているせいか蕩けるような甘い眼差しで彩芽のことを見遣りつつ、今一度優しい声音で囁きかけてくる。

「……ここまで連れて来ておいて説得力ないけど、嫌ならすぐにやめる。だから正直に言ってほしい。今ならやめてあげられるから」

おそらく、これが最終確認だということなのだろう。

ここに来るまで過ごしたバーでオーナーが席を外した際、彼から試してみないかと問われての不意打ちのキス。

初めてのキスは驚きの方が勝っていたけれど、少しも嫌じゃなかった。

今ならわかる。気づいていなかっただけで、この時は既に恋に落ちてしまっていたのだらう。

あの夜はまだ自分の気持ちがわからなくて、何もかも酔ったせいにして。

「キスも嫌じゃなかったし、駿さんになら何をされても平気な気がします。だから大丈夫です……やめないでください」

「彩芽ちゃん、可愛すぎ。後で嫌なんて言ってきたら、もう離してあげないからね」

「ひゃ……んんッ」

彼に素直な気持ちを伝えすべてを委ねたことで、お試しだというのにリップサービスを怠らない、優しい本物の王子様のような、彼とのチョコのように甘い夜はこうして幕開けしたのだった。

彩芽の声を耳にした刹那。キラキラと煌めくほどに眩い、王子様の顔がぐにやりと歪み、苦しげな声音を響かせる。

「……っ、本当に、可愛すぎだって。そんなに煽られたら、俺……ヤバイ」

「あっ、やあん」

「彩芽ちゃんの声、可愛くてたまらない。だから、もっともっと聞かせてよ」

「やあだ。は、恥ずかしい……！」

「じゃあ、彩芽ちゃんが恥ずかしいって感じる余裕なんて俺がなくしてあげる。もう俺のことしか考えられないようにね」

彼の言葉は情事限定の常套句だと理解している。

けれどこれから繰り広げられる彩芽にとっての生まれて初めての行為に、彩りを添えるための美辞麗句だと思えば、特別な響きを孕はらんでいるように聞こえてしまう。

王子様のような彼がチラつかせる、捕らえた獲物を仕留めようとする雄を彷彿とさせる言動もまた、彩芽の胸を熱くさせた。

彼の形の良い薄い唇が彩芽の急所に狙いを定め、透き通るように白くほっそりとした首筋に、角度を変えては幾度となく食らいつついてくる。

きめ細やかな柔肌の表皮を優しく時に激しく啄つばまれ、その都度微ちひかに不可解な痛みを伴う。

それが所有印を刻む行為だと気づいた途端、言いようのない嬉しさが胸の中にじわりと込み上げる。

だが未知への不安からか、小さな身体は相反して、最大限に縮こまる。

そんな些細な彩芽の機微までを一つひとつ丁寧に汲み取るように、王子様の大きくて男らしい手が頭を優しく撫でながら、耳元に唇を寄せてくる。

「彩芽ちゃん。そんなに怖がらないで。優しくするから、俺のこと信じて」

そうして続けざまに、相も変わらず優しい声音で言い聞かせるようにして囁きかけてくる。

——駿さんがこのまま彼氏になつてくれればいいのに。そうしたらずっと側にいられるのに……

願ってもどうにもならない思いが胸の中で増幅していく。

彩芽はそんな思いを必死に抑え込む。そして彼を安心させ、滞りなく事を運ぶべく、彼の首に両腕を絡めてギュッとしがみついた。

「初めてでどうしたらいいかわかんないだけです。駿さんのこと信じてますから、続けてください」

彩芽の言葉を聞いて、彼はピクリと微かな反応を示して硬直し、一瞬の間を置いてから、ハアと悩ましい吐息を漏らす。

どうしたのかと困惑する彩芽の身体は、唐突に彼の細身ながらしなやかな筋肉に覆われた逞しい腕によって、ぎゅうぎゅうと強い力で包み込まれていた。

しばしの抱擁の直後、解放された彩芽の身体は彼により再度組み敷かれ、先ほどよりも切羽詰まった様子の彼に射るように強く熱い眼差しで見据えられる。彩芽は囚われたようになり、身動きさえも叶わない。

「頼むから、そんなに可愛いことばかり言っただけのこと煽らないでよ。手加減できなく

なるだろ。これでも俺、彩芽ちゃんのこと大事にしようと思死なんだからさ」

やはりどこか苦しげな表情の彼の言葉の裏に、彼の憂いが籠められていたことなど、この時の彩芽に知る由よしなどなかった。

「ちゃんと聞こえてる？」

無反応の彩芽に焦じれたように、どこか拗すねた声で問い返してくる彼に、ますます愛おしさが込み上げる。

——こんな素敵な王子様みたいな彼が初体験の相手だなんて。本当に夢のよう。

「はい。嬉しいです」

そのことを素直に伝えたのだが、どういうわけか彼の表情はますます困惑の色に染まっっていく。

「だから、そういうところだって言ってるんだよ」

「え？　そういうところって、どういう……」

どうやら彩芽の言動が彼を困惑させているようだが、それが何なのか彩芽には皆目見当がつかない。

「彩芽ちゃんは何を言っても可愛いってこと」

彼から返ってきた不可解な回答にも、目を白黒させるだけだ。

そんな彩芽のことを悩ましくも熱っぽい眼差しで見下ろしている彼の、つぶらな漆黒

の瞳がキラリと妖しく煌めいた。かと思った時には、彩芽の身に着けていた彼とお揃いのバスローブのあわいが大胆にはだけられていた。

つい先日まで桜の花が綻ほろんでいた季節だとはいえ、数分前にシャワーを浴びたばかりの肌が空気に触れるとひんやりとする。

そのせいも、まろび出た彩芽のお世辞にも大きいとは言いがたい、それでも形の良い胸の膨らみの中央、まだ誰にも触れられたことのない柔らかな新芽のような頂がツンと主張しており、それがどうにも恥はずかしい。

「キャット……待って」

あまりの羞恥に彩芽が思わず放った懇願は、少々意地悪さを増した彼に聞き入れてもみえず終いだった。

それだけではない。

彼は、やはりこういうことに慣れているのだろう。常に女性が喜ぶ台詞を欠かさなかった。

「悪いけど、もう待てないよ。それからこの手も邪魔。そんなんで俺のものになる気、あるの？」

独占欲を思わせる王子様の甘言に、彩芽は戸惑いつつも喜びを嘯なみしめ、酔いしれていく。

「……え？」

「あー、もう。何もかも可愛すぎだつて」

解けない魔法にかかってしまった彩芽には、どれもこれもがまるで媚薬のように作用してしまう。

やがて恥じらいを見せる彩芽の胸元を隠すための手は彼により身体の横でベッドに縫い止めるようにして固定され、代わりに彩芽の胸は彼の大きな手のひらで優しく包み込まれていた。

当然だがそれだけでは済まされず、ふにふにと揉み込まれ淫らな形へと変えられていく。

彩芽の無防備な唇のその間からは、自身のものとは思えない鼻にかかったような、悩ましくも甘ったるい吐息が零れ始める。

「はあ……や、ああんっ」

彼の手が胸の膨らみを驚掴み、ふにやふにやと翻弄するたびに硬い芯を持った敏感な場所が擦られ、なんとも甘やかな痺れをもたらす。

同時に、ゾクゾクとする感覚が背筋を這い上がってゆく。

その痺れが徐々に増幅し、やがて離れた下腹部の奥が不可思議な熱を持ち始める。

初めて味わう感覚に思わず両膝を擦り寄せた彩芽は、足をもじもじさせることで堪

えた。

そんなことに気を取られている彩芽の間でも突くようにして、いつしか彼は胸に顔を

埋め——

「ひや……ああんっ」

熱くねっとりとした彼の舌がぷっくりと膨れほんのりと赤みを帯びた乳首に絡められ、チロチロと微細な動きで捏ねて転がすように刺激し始めた。

はじめはくすぐったさの方が勝っていたが、彼に執拗に敏感なポイントばかり攻められるうちに甘美な痺れへと変貌を遂げ、彩芽の半開きになっている口の間からは、甘えるような艶めいた吐息と声とが零れ始める。

「や……はあ、んッー」

「ダメだよ」

たちまち羞恥に苛まれた彩芽が咄嗟に手で口を覆うことで声が漏れるのを防ごうとしたが、彼の少し拗ねた声と手でやんわりと制されてしまう。

彼の言動にすっかり酔いしれていたはずが意地悪をされてしまったことにムツとして、彩芽は彼に抗議の視線を送ることで抵抗を露わにする。

彼は宥めようとするかのように、チュッと彩芽の額に優しく口づけてきた。そうして甘やかな声音で耳元に囁く。

「彩芽ちゃんの声、とつても可愛いから。だから我慢しないで聞かせてほしい」
 こういうことに慣れている彼に対して、無性に腹立たしくなってくる。
 そんな心情が言葉となって口からも零れていた。

「もう、やだ……」

「俺のことが嫌？」

どうやら彼は、思い違いをしているようだ。

それに表情だつて心なしか悲しげに見える。

——お試しだつて言つたくせに。意地悪だつてしたくせに。どうしてそんな表情するのよ。

心がぐらりと揺らいだ。一瞬、絆ほだされそうになつたけれど、ぐつと堪たえしのぐ。

彼はこういうことに慣れているだけでなく、お芝居も手慣れているのかもしれない。

——一体これまでどれほどの女性を相手にしてきたのだろう。ダメダメ。考えるだけ無駄だ。

だつて、これは一夜だけのお試しなのだから。

妙な期待をしてしまう前に、さつさと終わらせなければ取り返しがつかなくなる。

そう思っている時点で既に手遅れなのだが、この時にはまだ自覚がなかったのだから仕方がない。

「恥ずかしいから嫌だつてことです」

行為を全うするべく放つた彩芽の言葉に、彼はキツパリと言いつつ切った。

「なら、やめてあげない」

これには少し啞然となりつつも、彩芽も負けてはられないとばかりに、ついつい強い口調となつてしまう。

「意地悪なんですわね」

それなのに……彼は思いの外真剣な眼差しで彩芽のことを真まっ直すぐに見据まえてくる。

「だつて俺、彩芽ちゃんのこと、もつともつと知りたいつて思つてるし。それに俺のことが嫌なわけじゃないみたいだから、俺のことも知つてほしいしね。だからやめてあげない」

心から彩芽のことを知りたい。そう言われた気がして、心臓がドクンと大きく跳ね上がる。

だが悠長にときめいている時間など与えてはもらえなかった。

「あつ、ちよつ……そんなとこ、やーだあ……」

見る間にバスローブを剥はぎ取られ、素はっ裸にひん剥むかれた挙げ句に、両脚を大胆に押し開かれ、誰にも晒さらしたことの無い恥ずかしい場所に顔を埋められてしまったのだ。

瞬間、チュツという可愛らしい音が辺りにこたえました。

その音とは対照的にいかがわしいことをしたというのに、どうしてこんなにも彼は爽やかなのだろうか。やはり王子様然とした見かけゆえなのだろうな……などと呑気に思っているうちはまだ余裕でいられたが、それもここまでだ。

まだ開花していない花芽に口づけを落とされた彼は、彩芽を上目遣いに見つめてくる。

彼の微かに紫がかつて黒く澄んだ瞳も甘い容貌も、欲にまみれた雄の匂い立つような色香を纏まとっており、彩芽の視線だけでなく心をもしっかりと捉えて離さない。

彩芽の胸の鼓動がドクドクとうるさいくらいに騒ぎ始める。

獐さむらい猛な百獣の王に仕留められてしまった草食動物にでもなった心地だ。

だが不思議と恐怖心はない。

彼とのキスで解けない魔法にかかっているせいか、彼にならずすべてを委ねてもいいとさえ思っている。そこに羞恥がないと言えば嘘になる。

けれどその羞恥さえもがスパイスとなり、彼に加勢でもしているかのよう。彩芽の身体は甘い痺れによって支配され、彼にキスされたところは既に恥ずかしいほどに潤っている。

その感触が気にかかつてどうしようもない。

初めてなのに、もしかして自分はおかしいのだろうか……？

彩芽が密かに不安になっていると、絶妙なタイミングで彼の優しい声音が耳に流れ込

んできた。

「それに安心して。彩芽ちゃんは、どこもかしこも綺麗で美味しそう」

「そっ……そんなわけない」

反論しつつも、たちまち彩芽の胸は温かなもので満たされてゆく。

自分でも見えない場所だし綺麗なわけがない。ましてや美味しいはずもないのだが。

彼にそう言われると途端に安心できるのはなぜだろう。

「嘘だと思うなら、それを今から証明してあげる」

安堵しかけた彩芽の元へ嬉々として放たれた、彼からの意味深な台詞を最後に、こういう行為に慣れている彼に憤り、醒めかけた夢に再び誘われて、彩芽の視界は霞でもかかったように、白くぼやけて覚束なくなっていく。

優しくも容赦のない愛撫が施され、初めて味わう甘やかな快楽の狭間。彩芽がイヤイヤと首を左右に振って意思表示するものの、彩芽の頑かたくな心同様に固く閉ざした秘めたる場所を解すのに夢中な彼には、最後まで聞き入れてもらえず終いだった。

「あつ、やん……ああつ……」

代わりに、彩芽のすべてを暴くようにして、長く節くれ立った彼の指が蜜口の奥の鬚ひげを引つ搔かくように幾度も蜜をグチャグチャと搔かき出し攪か拌する。

お洒落なホテルの一室には、ぴちゃくちゃと、淫猥いんわな水音が立ち込め始める。

その合間も、彼のもう片方の手は彩芽の小さな身体に至るところに這わされており、柔らかな肌の感触を味わい尽くす。

また彼の形の良い薄い唇や滾るように熱くざらついた舌では、彩芽の唇や口腔はもちろん、上気し汗ばんだ首筋や鎖骨やその窪みに……と順に隈なくゆっくり丁寧に辿ってゆく。

その様は彩芽のすべてを貪ろうとするかのよう。

ずっと余裕そうだったけれど、少しは興奮してくれているのかもしれない。

見かけは相も変わらず王子様然としているが、時折漏らす息遣いも随分と荒々しくなってきた。

そんな本能を剥き出しにした彼の雄を思わせる姿に感化されたのか、彩芽の気持ちと官能とが体温と一緒にどんどん高められてゆく。

彼から本当に愛されているのではないか、という錯覚に陥りそうになったほどだ。

はじめこそあつた異物感と圧迫感もいつしか薄れ、彼の丁寧な愛撫によりもたらされる痺れがより一層甘美なものへとなってゆく。

その頃には彩芽はくたりと脱力し、身も心も何もかもが蕩かされていて、思考も覚束なくなっていた。

ふいに愛撫が止まり、彩芽はベッドにくたりと身体を投げ出す。胸を上下させ浅い呼

吸を繰り返しながら、涙でぼやけた眼で彼のことを窺い見る。

その瞬間、彼の瞳と視線とが交わり、彩芽の鼓動がドクドクと急加速する。

それらが彼に聞こえるのではという懸念を抱くまでもなく、彼の整った甘やかな容貌が眼前にぐいと迫ってくる。

急展開に彩芽の心臓が止まってしまうのではないかと本気で案じるほどだった。

互いの鼻先が微かに触れ合うほどの至近距離に、彩芽が呼吸も忘れていているのに、彼は小憎らしいほど涼しい顔をしている。

これも慣れているせいかと、彩芽が人知れず自身と彼との経験値の差に落胆しかけたと同時に、彼がニッコリとこの場にそぐわない笑顔を綻ばせた。

笑顔一つでこんなにも容易く彩芽の心を虜にするなんて、彼はどれほどのプレイボーイなのだろうか。

——きつと、何人もの女性ともこういう一夜限りの夜を過ごしてきたのだろう。私のことなんてすぐに忘れちゃうんだろうな。

思考に耽る彩芽のぼんやりとした視界の中、彼が微かに首を傾げ、表情と同じ心配そうな声で恐る恐るといった様子で尋ねてくる。

「大丈夫？」

「……あつ、はい。あんまり気持ち良くてぼーっとしちゃってました」

「よかった」

彩芽の返事を耳にした利那。彼は心底ホッとしたようにそう呟いて安堵の息を吐き、先ほどよりも嬉しそうににこりと微笑んだ。

艶を増した彼の笑顔に目を奪われ、またもや魅入られたように囚われてしまう。

視界に涙の膜が張っていたのが徐々に晴れていく。クリアになった視界の中で彼は、最終確認を取ってきた。

「今から彩芽ちゃんのことを俺だけのものにするけど、覚悟はいい？」

もうこれほどのことをしておいて今更だとも思うが、初体験の彩芽への気遣いを怠らない。そんな彼の真摯な対応に、彩芽の心はますます惹きつけられる。

——何だかお姫様にでもなった気分。夢ならもうこのまま醒めずにいてくれたらいいのに……

彩芽は夢心地の中で彼に向けてコクンと顎を引くことで意思表示して見せた。

その途端、彼は心底嬉しそうに微笑むと彩芽の華奢な身体を抱き起こし、思っていた以上に逞しい胸板へと抱き寄せる。

「俺、彩芽ちゃんのこと大事にしたいって思ってるから、少しでも痛かったら無理せず言ってほしい」

彼の纏っているバスローブ越しに、甘い台詞と温かなぬくもりと心地良い心音が一

緒に伝わってくる。

そのすべては媚薬のように作用して、彩芽の心の奥底にまでじんわりと染み入ってゆく。

感極まってしまった彩芽は、小さく「はい」とだけ答えて、彼の広い背中に両腕を一杯広げてギョツとしがみついた。

すると彼に、骨が軋むほどの強い力で抱き締められ。

「あ……ヤバイ。もう、可愛すぎだっつて」

彩芽の耳元に、昂たかねつてしまった感情をなんとか押し殺そうとする彼の苦しそうな声音が投下された。

これも情事に彩りを添えるための常套句に違いはない。なのにこんなにも嬉しいだなんて、やはり酔っているからなのだろう。

だったら今だけ——今だけは、彼との甘やかなひとときに酔いしれていたたい。

彩芽のささやかな願いが通じたのだろうか。彼から思いがけない熱烈な台詞が届いた。「彩芽ちゃん。俺、彩芽ちゃんのが好きだ。もうこのままずっとこうして腕に閉じ込めておきたいくらいだよ」

「……」

思いがけないどころか、寝耳に水。いや、青天の霹靂。あまりに現実味のない言葉

だったために、彼にしがみついたまま硬直した彩芽は驚きすぎて二の句が継げなかつたほどだ。

彼にしてみれば、反応がない上に、微動だにしない彩芽のことを不思議に思ったのだろう。

彩芽の身体をゆっくりと腕から解放した彼が顔を覗き込んでくる。そして——
「ダメ？ 俺のこと、嫌い？」

恐る恐る不安そうに窺ってくる。

これも、彼の常套句なのだろうか？ 女性をその気にさせるための殺し文句的な……彼の漆黒のつぶらな瞳をじいっと食い入るように見つめてみる。

とても嘘を吐いているようには見えない。

もしかしたら酔っ払っているせいで、自分に都合良く聞こえているだけかもしれない。

——それでもいい。今この瞬間だけは彼のことを信じたい。

出会ってまだ二度目だとか、一緒に過ごしてまだ数時間しか経っていないだとか、そういうことはどうだっていい。

「駿さんのことが、好きです……」

気づいた時には、ふるふると何度も首を左右に振って、素直な想いを紡ぎ出していた。「よかった」

彩芽の想いを聞き届けた彼が心底嬉しそうにそう口にする。眩い笑顔を綻ばせた端正な容貌は、残念なことに涙でぼやけていた。

けれどこの夜の記憶は大事な宝物として、今も彩芽の胸の奥に色濃く残っている。それほどに、彼と過ごした夜は甘美なものだった。

その後、彼は彩芽の身体をベッドにそうと横たえて避妊具の準備を済ませると、いよいよその時を迎え、彩芽の緊張感は極限状態。

「彩芽ちゃん、大丈夫だよ。痛ければすぐにやめるから」

彼は余裕がないながらも、なんとか彩芽を少しでもリラックスさせようと終始優しく気遣ってくれていた。

不安と緊張でガチガチになった彩芽の身体を優しく解すようにして、甘やかなキスの雨を降らせながら、そうと優しく頭や身体を絶えず撫で続けてくれたおかげで、破瓜はかの痛みにも耐え、なんとか彼のことを受け入れることもできた。

何より彼と触れ合い、彼と深いところで一つに結ばれたことが、これ以上ないほどに幸せだった。

彩芽と深く繋がり合った彼はしばらくの間動かず、彩芽の身体を大事そうに逞しい腕に包み込んだままでいてくれた。

幸せを噛みしめている彩芽と同じ想いでいてくれるようで、それさえも嬉しくて

どうしようもなかった。

「はあ……ううっ」

しつとりと汗ばんだ互いの素肌を通して、時折悩ましげに吐息を漏らす、余裕のない彼の鼓動が心地良く伝わってくる。彼が気持ち良くなってくれていると思うと、それだけで言いようのない喜びが押し寄せてくる。

同時に彩芽の知らない彼のことももっとも知りたいたいという想いが膨らんでもいい。もつと余裕をなくした彼の姿を見たいと思うのに、彩芽を気遣うあまり動こうとしない彼に焦れた彩芽から「もう平気です。それにこのままじっとしている方が辛いです。だから、駿さんの好きなようにしてください」

そう言うって促したほどだ。

すると彼は切羽詰まった様子で、彩芽を狂おしいほどの熱視線で見下ろしながら、余裕なく言い放つ。

「だから、そんな風に可愛いこと言わないでって言うてるだろう。ただでさえ理性をなくして、彩芽ちゃんのことをめちゃくちゃにしてしまいそうで怖いのに。もうどうなっても知らないから」

おそらく不慣れな彩芽に合わせて柔和だった口調から、少々粗野な口ぶりへと様変わりしていた。

それだけ彼が我を忘れて興奮しているということだろう。

そんな彼の些細な変化でさえも、彩芽の胸を打つ。

彼をそうさせているのが自分なのだと思うと、胸がいつぱいになる。

——駿さんになら何をされても構わない。好きにしてほしい——

彼への想いに突き動かされた彩芽は羞恥も忘れ、彼の身体に脚を絡めてギュツとしがみつく。

たちまち膣内に受け入れた彼自身がドクンと大きく拍動する感触がして、彩芽の胸をなおも熱くさせる。

もう胸どころか、どこもかしこもいつぱいで苦しいくらいだ。

余裕をなくした彼は彩芽の想いに応えるかのように、彩芽の小さな身体をぎゅうと抱き込み唇に食らいつくように深く口づけてきた。

熱い舌を挿し込まれ、チロチロと口蓋をくすぐられ、舌を搦め捕られ、チュチュツと吸い立てられる。

もうそれだけで彩芽はどうにかなくなってしまいそうだ。

散々、彩芽の口腔をあますことなく蹂躪した彼は、甘やかな相貌に玉の汗を迸らせ苦しげに呻くと、彩芽の腰をぐいと引き寄せ交わりを深める。あたかも蜜洞の奥へ奥へと淫刀をズンズン突き入れ穿つようにして、腰の動きを加速させた。

激しく揺さぶられる彩芽の肌と彼の肌とがぶつかり合うパンパンという打撃音と、ドチュツドチュツ……とどちらのものとも判別できない夥しい体液が飛び散る音が部屋に充滿する。

いつしか彩芽がわずかに保っていた羞恥も理性も意識も何もかもが薄れきっていて。ただただ彼に必死になつて絶りつくようにしてしがみついていることしかできない。けれどもそれは彩芽だけではないのかもしれない。

彼も何かを必死に堪えるように、眉間にいくつもの皺を刻んで愉悅に抗っているように見える。

頭の片隅でそんなことを思考しつつも、余裕をなくした彼の起こす甘美な快樂という大きな波の狭間で抗うこともできずに揺蕩い続ける。

興奮しきつた獣が咆哮を放つように呻きながら、怒濤の律動を繰り返す彼の荒々しい息遣いに紛れて、彩芽の悲鳴にも似た嬌声がひっきりなしに飛び交っていた。

「あつ、やああん……ああああつ」
そのうち彼の律動がどんどん加速し彩芽の意識が途切れ遠ざかっていく狭間で。

——このまま彼と一緒に溶け合つて一つになればいいのに……

人知れず心の内でそう願っていた彩芽の身体がぎゅうぎゅうと彼によつて抱き締められる。

「つ、はあ、あや……め。彩芽ツ……好きだ……!」

譫言のように名前と甘い愛の言葉とを繰り返す彼に熱烈なキスで骨抜きにされてしまったのを最後に、彩芽の意識はブツリと途絶えていた。

* * *

翌日、目を覚ました彩芽の隣には、当然のことながら甘い夜を共にした彼がいた。
「おはよう。身体大丈夫?」

「お、おはよう……ございます。はい、平気です」
彼の視線とかち合った刹那。寝起きだというのにやけに爽やかな笑顔と共に身体を氣遣つてもらい、その凄まじい破壊力に心臓がドキンと大きく跳ね上がる。

危うく心臓麻痺でも起こすのかと案じたが、おかげで夢ではなかったのだと実感することができた。

彼の寝起きのせいかわかに掠れた低めの声音にも、ドキドキさせられた。

夢のように素敵な夜同様、気恥ずかしくも甘酸っぱい素敵な朝だった。

その後も、ルームサービスではあったが美味しい朝食と一緒にゆっくり味わいながら、彼のことや二人のこれからの話までしてくれた。

実は彼が全国の百貨店をはじめ世界にも進出している、誰もが知るあの老舗高級チョコレートブランド「YAMAOTO」の社長の息子、つまり御曹司であること。

先月の三月まで修業のために、全国の百貨店に出店している各店舗で取り扱う商品の開発に携わっていたこと。

そこまで聞かされた彩芽は、これまで彼と一緒に過ごした、短い時間の中で知り得た数少ない情報と照らし合わせて、うんうんと頷いて納得する。

——なるほど。だから毎週ガナツシユを……それにチョコに詳しいわけだ。

感心しきりだった彩芽の視界の中で、先ほどまで淡々と説明をしてきていたはずの彼の表情がガラリと変化した。そして彼の表情同様に、えらく真剣な低い声音が届いたことで、彼の今置かれている現状を知ることとなる。

現在、彼はMBAの学位取得のためビジネススクールへの入学申請の真っ最中で、その準備のために日本とアメリカを往き来していること。

五月には書類審査の結果が出るそうで、合格後は入学に向けての諸々の手続きや準備のためにすぐに渡米し、そのまま滞在すること。

そして、その予定期間は三年。
「絶対にその期間で取得して日本に戻ってくる。だからそれまでの間、待っていてほしい」
彩芽が彼からの突然の申し入れに、驚きを隠せず目を見開いたまま硬直して

いると、彼は怖いくらいに真剣な表情でこうも言ってくれた。

「出会ってすぐにこんなことしておいて、信じてもらえないかもしれないけど、俺、本気だから。彩芽ちゃんとこのまま終わりになんてしたくない。俺と真剣に交際してほしいんだ」

本当に夢のようなひとときだった。

そして彼は徐に都内でも名の知れた「光石総合病院」の院長の氏名が記された名刺を彩芽に渡してこう言った。

「それから昨夜のことなんだけど、もしものことがないとも言切れないから、気になるならこの病院で受診して。もしもの時は絶対に責任を取るから、安心してほしい」

この発言には心底驚いたが、彼にしてみれば、一夜を共にした彩芽に対して責任を感じての発言に過ぎなかったのかもしれない。けれど、彼にここまで真摯に対応してもらえたことがどうにも嬉しくて、あやうく泣きそうになったほどだ。

そんな思いもあったが、この状況が信じられないという気持ちの方が大半を占めていたのもあったし。何より恋の経験さえなかったのだ。

彼に対するこの感情が流されたゆえの一次的なものではないという確証など持てなくて、結局は「少し考える時間をください」と伝えて保留にもらった。

だが断るつもりなど微塵もなかった。

それほどに、彩芽にとっては彼と初めてキスを交わしてから、あたかもずっと解けない魔法にでもかけられてしまったかのような、幸せな心持ちだったのだ。

そうして迎えた彼との約束の日——あの夜からちょうど二週間後、彼が渡米する前日。「待っています」

直接会ってそう返事をするつもりでいたけれど、いつまで経っても現れない彼に待ちぼうけを食らってしまった、あの日を迎えるまでは——

数日後、何か来られなかった事情があったのではと、空港に向かい彼と会って真意を確かめようと思ったのだが、彼の隣には姉の咲良と同業のモデルかと思紛うほどの綺麗な女性の姿があった。身を寄せ合う二人の親密そうな雰囲気彩芽は動揺して逃げ帰ってしまい、以来彼とはそれきりだ。

コンプレックスのせいで女性としての自信のない彩芽には、彼に真相を確かめる勇氣がなかった。彼の口から、現実を突きつけられるのが怖かったのだ。

それから一ヶ月ほど経った頃、妊娠が判明した時にはひどく驚いたし正直不安もあったけれど、心底嬉しいと思った。

彼と過ごしたあの夜は夢ではなかった、あの夜は確かに彼に愛されたのだという何よりの証に思えたし、産まないなんて選択肢はなかった。

実際にこの子が生まれてからも、日増しに彼に似てくる子どもと過ごす中で、やはり彼にも何か事情があったのかもしれない。あの女性だって、見送りに来ていた友人だったのかもしれない。振られてもなお、そんな都合の良い考えを拭いきれずにいた。あれからもう三年以上が経つというのに、未だにあの夜の魔法は解けないままだ。

2 シンママシヨコラティエールと可愛い王子様

「それじゃあお姉ちゃん、翔かけろのことよろしくお願いします」
「……はあい、いつてらっしゃい」

午前六時。出勤のため既に身支度を調えた彩芽がリビングに入ると、ダイニングのソファで姉・咲良が気怠けだるそうに半身を起こすところだった。朝方帰って来てうたた寝でもしていたのだろう。眠気で目をしょぼつかせる咲良に愛息を託すと、そのままエントランスへ向けて足を踏み出した。

シヨコラティエールの朝は早い。

そのため彩芽は、二歳になって半年ばかりの可愛い盛りまかの我が子・翔がまだ夢の中にいる間に家を出なければならぬ。

本当はもっともつと翔と一緒にいてあげたいし、この春入園した保育園にだって連れて行ってあげたい。

彩芽の転職に伴い入園して、ちょうど三ヶ月になる。入園当初はまだまだ寝足りなくてグズる翔をなだめすかしながら登園準備をして出勤前に保育園へ送り届けてから職場へ向かっていた。

だが生活環境がめまぐるしく変化したせいか、寝入ってしばらくすると大きな声を上げたり、火がついたように泣き出したり、手足をばたつかせて暴れたりするようになった。かかりつけの小児科医に相談したところ、睡眠中に恐怖や興奮で覚醒してしまうという、子どもに多い睡眠障害、夜驚症だと診断され、生活環境の変化に伴うストレスが原因ではないかと指摘された。

以来、家庭環境の整備を勧められ、職場近くのアパートから高級タワーマンションで暮らす姉の咲良の元に身を寄せている。

というのも、彩芽の実家は創業百年あまりの歴史を有し、新宿本店を拠点に全国展開している有名百貨店・暁を経営していて、祖父が昔気質で厳格な人であるため、子どもの父親の名前も告げないままシングルマザーになるなんて許すはずもなかった。

相手のことをあれこれ詮索されるのに堪えかねた彩芽は、出産を待たずに、早い話が勘当同然で家を出たのである。

世間一般で言うところの一夜の過ちあやまで子どもを授かってしまった、というの言い出しにくい要因ではあったが、相手である彼のことを言い出せずにいたのには、他にも理由があった。

実家が経営する暁は、全国の百貨店の中でも歴史も古く知名度もあるのだが、ここ数年売り上げが伸び悩んでいる。

その背景には、ここ数年で飛躍的に売り上げを伸ばし続けている、競合他社である老舗高級チョコレートブランド「YAMATO」の存在があったからだ。

景気の低迷で一時期は業績不振に陥っていたらしいが、YAMATOは現在の会長が打ち出した様々な戦略が功を奏し、チョコレートは元より、富裕層をターゲットにした高級腕時計や宝飾品、オーガーマイドのスイーツ等、独自のブランドを高め、日本のみならず海外にまでその名を知らしめた。

今では日本の「革新的企業」ランキングのトップ3に位置づけられているほどである。祖父はかねてより古いしきたりを重んじる頭の堅い人種なので、事あるごとに革新的な改革を打ち出すYAMATOを敵視してきた。

まさか子どもの父親がそのYAMATOの御曹司などと口が裂けても言えるわけがない。

そういう意味でも、元々彼とは縁がなかったのかもしれない。

三年前、一度は彼を待つと決めた時から、遅かれ早かれいずれはこうなるだろうとは思ってはいたし、翔を産むと決めた時から実家とは距離を置くのも覚悟の上だった。家を出る際には、祖父の手前大したことをしてやれず申し訳ないと言いつつも、両親から当面の生活に困らないようにと出産祝いを渡された。それは有り難く受け取ったが、翔のためにと今でも手をつけずに定期預金にしてある。

辛い経済的に恵まれた環境で育ったので、子どもの頃からの貯金もあった。それに姉が身元保証人になってくれたおかげでアパートも借りられた。

出産も超がつくほどの安産だったと、年配の産婦人科医からも太鼓判を押されたほどだ。

精神面や体調面で不安定になりがちな産後も、陰ながらサポートしてくれた両親や姉のおかげでなんとか乗り切れた。

出産以前から勤めていた店は出産を機に退社せざるを得なくなったが、未熟ながらもシヨコラティエールという専門職に就いていたおかげで、産後だというのにすぐに再就職もできたし、こうしてなんとか生活も成り立っている。

本当に有り難いことだし、自分は恵まれていると思う。

けれど、実際にシングルマザーとなつて、自分の命よりも大事な我が子に問題が発生してしまった時には、心細くて挫けそうだった。

—— やっぱり母親だけでは頼りないのかな？ そのうちどうして父親がいないのかと疑問に思う日が来るのかな？ その時にはどう答えればいいのか……こんな頼りない母親でごめんね。

連日のように夜中に泣きじゃくる翔を抱きしめあやしなながら彩芽が途方に暮れていた時、心配して仕事の合間に様子を見に来てくれていた咲良が見かねて一緒に住もうと声をかけてくれた。

これまで姉に対してコンプレックスを抱いていたが、それでも小さい頃から何かと可愛がってくれて、今もこうして困った時に手を差し伸べてくれる姉には感謝しても足りない。

何より、目に入れても痛くないほど愛おしくてどうしようもない翔の存在が、彩芽に頑張ろうという気力を与えてくれた。

だから今もこうして大好きなシヨコラティエールの仕事も続けることができている。

彩芽が働いている分、翔には寂しい思いをさせているという自覚もある。

そんなこともあり、平日は他の従業員よりも早く出勤し、その分退社を早くしてもらっている。

朝が早いと通勤時も混雑を避けられるという利点はあったが、体力的にキツイのも事実だ。

けれど、翔がいてくれるなら何だってできる。
彼——駿が約束のあの日來なかつたことに事情があつたとしても、今は彼のことを考
えているような余裕なんてない。

父親がいなくても一人で頑張つて、翔を立派に育てていかなければならないのだから。
彩芽は彼への想いをそつと大事に胸に秘め子育てに仕事にと励む日々を送つていた。

* * *

姉のマンションがある麻布から職場のある銀座まで、電車で約十五分。混雑のない車
両の入り口側の座席に腰かけ目を閉じる。東の間の仮眠を取つていると、あつという間
に最寄り駅に着いていた。

人の流れに沿つて降車し改札を抜ける。地上に出て見慣れた都会の街並みを五分ほど
歩いて裏通りに入つてすぐ、レンガ造りの可愛らしいチョコレート専門店「ボヌール」
が見えてくる。

フランス語で幸せという、そのままの意味通り、チョコレート職人が丹精込めて作つ
た美味しいチョコレートを食べて幸せなひとときを堪能してほしい。そんな思いから、
この店のオーナー兼店長の葛城が名付けたらしい。

葛城は両親と同年代である五十代で、彩芽にとつては頼れる父親のような存在だった。
いつものように店舗の裏手にある従業員専用の通用口から奥のロッカールームへと向
かい、作業着である白と黒のシックなモノトーンのコックコートに着替える。黒いコッ
クタイを締め、最後の仕上げに肩口すれすれの茶色がかつた柔らかな髪を後ろで一つに
束ねて準備完了。

姿見の前で身だしなみをチェックしてから、厨房へと足を踏み入れる。

そこにはいつものように、一番に出社して既に作業中の先輩シヨコラティエ・冴木一
太の姿があつた。

冴木は製菓専門学校時代からの一つ上の先輩だ。

昨年末から再就職先を探していた彩芽に、ちようど求人が出ていると言つてこの職場
に誘つてくれたのが冴木だった。

チョコレート好きの彩芽と同じくいつか自分の店を持ちたいという夢を持っていて、
とても勉強熱心な先輩だ。

翔が一歳になった頃から洋菓子店などで短期のアルバイトはしていたものの、任せら
れていたのは下準備や売り場ばかり。シヨコラティエールとして二年近くものブランク
があつた彩芽の勘が戻るまで根気強く指導もしてくれた。

採用された当初は、翌日に使用するチョコレートの計量や、溶かしやすくするために

刻んだりといった下ごしらえやラッピングなどの雑用が主だった。それが今では、一部の商品に限ってだが、仕上げとなる、溶かしたチョコでのコーティング。チョコレートを作るのに一番重要な工程である、テンパリングを任せてもらえるまでになっている。楽しいことばかりではないが、大好きなチョコレート作りに毎日携わっていられるのが嬉しくてしょうがなかった。

おそらくそんな気持ちも表情にも出ていたのだろう。

「おはようございます！」

「おー、彩芽。おはよう」

彩芽が明るい声で挨拶をした途端、いつものように作業していた手を止めた冴木が笑みの交じった朗らかな声で出迎える。

かと思えば、前日作っておいたガナツシユの仕上げ作業に取りかかろうとしていた冴木から、これまたお決まりの軽口が飛び出した。

「今日もまた随分と張り切ってるなあ、彩芽は」

お互いマスクを着用しているため細かな表情までは窺えないが、少し垂れ気味の目元に深い笑いじわを刻んだ冴木は心底楽しげだ。

チョコレート職人は、その日の気温や湿度といったちよつとした環境の変化によって、微妙に味が異なってしまう、とてもデリケートなチョコレートを毎日扱わなければなら

ない。

安定した味と品質を保つためには、性質を熟知したきめ細やかな作業と熟練した技術が必要になる。

作業にも技術を保つためにも体力が必要になる。もちろん積み重ねた経験も大事だが、そのためにも体力が欠かせない。

ただでさえ男性には体力で敵わないというのに、日々の育児と仕事との両立で手一杯な彩芽にとっては、それが大きなネックだった。

それでなくとも、幼い子どもは体調を崩しやすい。保育園に通い団体行動をしていれば尚更だ。いつ保育園から連絡があるとも限らない。

店長も他の先輩たちも、シングルマザーである彩芽のことを気遣ってはくれているのだが、だからこそ、子どものことで迷惑をかけたくない気持ちもある。

そのせいか、余計にしつかりしなければと、常に肩に力が入っているような状態でもあった。

けれどこうして職場で大好きなチョコレート作りに励み、冴木や他の先輩たちと他愛ないやり取りをしている間は、シングルマザーゆえの様々な不安も忘れ、いい気晴らしにもなっていた。

最愛の息子に出会えたこと以上の幸せはなく、シングルマザーといえど子どもを産ん

だことに後悔はない。

だが彩芽からすると、冴木のように男性で体力もあり、加えて仕事だけに打ち込める身軽な独身をふと羨ましく思うのも事実だった。

朝から擲掬われ、少々ムツとしてしまった彩芽は冴木に負けないぐらいの軽口を返す。

「それいっつも言ってますけど、普通だと思っただけですけど」

「チヨコが好きで好きでたまんねーって顔してるし」

「そんな顔してますかね」

「してるしてる。子どもの頃から夢だったシヨコレティエルとして働けるのが嬉しいからって、あんまり無理すんなよ……つっても無理か。彩芽は可愛い翔と大好きなチヨコのことになると目の色が変わるもんなん」

何やかんや言つて擲掬われたりするが、最後にはこうしてさり気なく氣遣つてもくれる。

姉しかいない彩芽にとつて、冴木は頼りになる兄のような存在だった。

「大丈夫ですよ。先輩より若いんですから」

「お前な、年寄り扱いすんじゃないよ。たつたの一歳しか違わねーんだからさ」

「ふふっ、冗談ですよ。すみません」

年寄り扱いされて拗ねる冴木は、枠から外し一口大に切ったガナツシユのコーティン

立ち読みサンプル はここまで

グ作業——トランベの最中だったため、二股タイプのココレートフォークを高く掲げて彩芽のことを威嚇する体勢を取っている。

対して彩芽は、軽く頭を抱えて身を伏せ、降参のポーズを取って見せた。

その頃には店長を筆頭に他の先輩シヨコレティエ含めて五名全員が揃っており、「あいつらまたやってるな」という温かな視線で二人を見守ってくれている。

始業は八時だが、今日は近くの百貨店での催事で、限定商品を販売することになってる。そのため、出勤を七時に早めたのだ。

売り場は、アルバイトの女子大生とパートタイムの三十代の主婦と店長夫人三名の交代制になっている。

そんな中、降参のポーズで笑い交じりに謝罪する彩芽に、ふうと呆れたような笑みを零した後、すつと笑みを引つ込めた冴木が心配そうに問い掛けてくる。

「で、昨夜はどうだった？ 大丈夫だったのか？」

翔の夜驚症のことだ。

「おかげさまで、最近はずることも減ってきて、今日は朝までぐっすりコースでした。といっつも起きる前に姉に託して出てきましたけどね」

ゆっくり体勢を整えた彩芽がニッコリ笑つて返せば、冴木もようやく安堵の息を吐く。このやり取りも、ここ最近の朝のルーティンになりつつあった。